

項羽 項羽

【原文・書き下し文】

- 1 力拔山兮人所^{ちから}知^{やま} 山を抜くは人の知る所なるも
- 2 鴻門之會計何癡^{こうもん} 計^{かい} 何ぞ癡かなる
- 3 英雄膽見沈^{えいゆう} 船日^{たん} 胆を見ず 船を沈むる日
- 4 王霸圖空弒^{おうは} 帝時^と 帝を弒す時
- 5 七十戰場誰得^{ななじゅう} 敵^{せんじょう} 誰か敵するを得ん
- 6 八千子弟悉無^{はっせん} 遺^{しん} 悉く遺る無し
- 7 重瞳亦眩斗^{ちゆうどう} 后酒^と 重瞳も亦た斗后酒に眩み
- 8 失卻龍顏隆^{しつぎやく} 準^{りゆうがんにりゆうじゆん} 龍顏隆準の児

【詩型・押韻】

七言律詩

『広韻』上平五支(知・癡・兒六脂(遺)七之(時)同用。『平水韻』上平四支。

【校勘】

【補説】参照。

【現代語訳】

項羽

その力が山を打ち抜くほどだったのは誰もが知るところであつたが、鴻門の会での計略はなんと馬鹿げていたことか。

船を沈めた日は英雄の心意気を示したが、皇帝を殺した時に天下制覇の野望は幻となつたのである。

七十回もの戦いでは誰一人として敵う者などなかったが、八千もの若者たちは誰もみな生き残ることはなかった。

目に二つの眸を持つといつても一斗の酒に先が見えなくなり、皇帝の骨相をした者を取り逃がしてしまふ羽目になつたではないか。

【解題】

この詩は天保四年（癸巳 一八三三）、月性十七歳ころ、藏春園での作。内容は秦王朝の衰退に乗じて天下に覇を唱えようとして劉邦と争った項羽を詠んだもの。結果、劉邦が勝って漢王朝の初代皇帝、高祖となるが、月性はその敗者である項羽を批判的に詠む。このように歴史を題材にしたものを「詠史詩」といい、現存する月性詩の中で最初のころの詠史詩に入る。

【語釈】

0 項羽 項が姓、名を籍といい、羽は字（中国では名で呼ぶことはタブーであった）で、下相（江蘇省宿遷市の西南）の人で、代々、楚の將軍の家柄だった。

1 力拔山兮 漢、司馬遷の『史記』『項羽本紀』に、劉邦の軍に垓下（安徽省宿州市靈璧県南部と蚌埠市固鎮県北部）で包囲されて万策尽きた項羽が、その愛人、虞美人を前に「力山を抜き気は世を蓋う。時利あらずして雖（項羽の愛馬の名）は逝かず。雖の逝かざるを奈何すべき。虞や虞や若を奈何せん（力拔山兮氣蓋世。時不利兮雖不逝。雖不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈何）」と歌ったのに拠る。項羽が並外れた強者であったことは、同じく『史記』『項羽本紀』に、「籍（項羽の名）長さ八尺余り（二尺は22.5cmで180cm以上）にして、力は能く鼎（食物を煮る金属製の重い容器でふつうは三本足を扛ぎ、才気は人に過ぎ、呉中の子弟（若者）と雖も皆已に籍を憚り（恐れていた）（籍長八尺、餘力能扛鼎、才氣過人、雖吳中子弟皆已憚籍矣）」とある。唐、于季子「項羽を詠む（詠項羽）」詩に、「北に伐ちて趙を全うす（統一する）と雖も、東に帰りて秦に王たらず（関中の王となれなかつた）。空しく歌う山を抜く力、江を渡るの人と作るを羞づ（北伐雖全趙、東歸不王秦。空歌拔山力、羞作渡江人）」。

2 鴻門之會 項羽と劉邦が、秦の都のあった咸陽の西、鴻門（陝西省西安市臨潼区）で会したことをいう。そもそも秦を倒すために擁立された楚の懷王が、最初に秦の都、咸陽に攻め入った者をその地一帯の関中の王にすると約束し、劉邦がその一番乗りを果たした。遅れを取った項羽がそれに怒ったため、当時、力関係では圧倒的に不利だった劉邦が項羽に詫びを入れるために鴻門に赴いたのである。項羽の軍師、范増はこれを絶好の機会と項羽に劉邦の殺害をしきりに促すが、優柔不断な項羽は劉邦を取り逃がしてしまい、その後、両者の形勢は逆転していくことになる。計 劉邦を殺害するための計略。劉邦を劍舞でもてなすと称して項羽の従弟、項莊に殺害させようとしたが、劉邦の部下である張良と親しかった項羽の叔父、項伯はそれを察知し劍で舞いながら劉邦を守った。明、陳衡「戲馬台詩（戲馬臺詩）二十首」其の二十には、「項羽英雄力山を抜くも、台を築きて馬と戯れ樂しみて還るを忘る。鴻門宴を設けて徒らに計を生じ、大地溝に分けて（項羽と鴻溝というところを境に天下を分けようとした）好事閑たり（項羽英

雄力拔山、築臺戲馬樂忘還。鴻門設宴徒生計、大地溝分好事閑」と項羽の無策ぶりを批判する。何 詠嘆のことば。癡 愚かで間が抜けている。

3 英雄 項羽を指す。 **膽見** 「膽」は胆力、度胸で、「見」は外に示すこと。 **沈船日** かつて項羽が全軍を率いて漳水という河を渡った時の決死の覚悟として、『史記』『項羽本紀』に、「船を沈め、釜甑を破り〔炊事用の釜と甑を壊して〕、廬舎〔家〕を焼き、三日の糧〔三分の食料〕を持って、以て士卒〔兵士ら〕に必ず死に、一も還る心無きを〔必死の決意で生きて帰る心など微塵もないこと〕示さんとす〔沈船、破釜、燒廬舎、持三日糧、以示士卒必死、無一還心〕と記す。

4 王霸 霸王という称号を得た項羽を指す。『史記』『項羽本紀』には、項羽がみずから「西楚の霸王〔西楚霸王〕」となったことを、更にはその「項羽本紀」の最後に付された司馬遷の項羽に対する評価のことばの中にも、「号して霸王と為す〔號爲霸王〕と記しており、ここは第三句の「英雄」と対になっていることから、平仄という作詩上の関係で「王〔平の字と〕霸〔仄の字を入れ替えたものと見ておく。もつとも仁徳で天下を治める者を王者といい、武力で天下を治める者を覇者というが、ここはそういう者たちの天下統一という大業の意としての「王覇」と見ることも可能であろう。嘉永元年（一八四八）、月性が始皇帝の事蹟を記した『史記』『秦始皇本紀』を読んだ作った「秦紀を読む〔讀秦紀〕」詩〔『清狂遺稿』上三三二歳〕に、「王霸業成りて六国を并すも〔韓・趙・魏・燕・斉楚の六国を併合したが〕、神仙路絶えて三山を失す〔秦の始皇帝が徐福のことばを信じて東海にあるという方丈・蓬萊・瀛洲の三つ神山に不老不死の薬を求めさせたが結局その場所はわからなかった〕〔王覇業成りて六国、神仙路絶失三山〕と始皇帝の全国制覇はわずか彼一代しか保ち得なかったことを詠む。 **圖空** 天下統一という大業のもくろみが泡となって消えてしまう。 **弒帝** 項羽が義帝を殺したことをいう。はじめ秦を打倒するために担ぎ出されたのが楚の王族の末裔で、当時、羊飼いをしていた熊心である。彼は項羽によって懐王、さらには義帝として祭り上げられるが、邪魔になった義帝は、漢の元年（紀元前〇六）、彭城〔江蘇省徐州市〕から遙か南方の郴〔湖南省郴州市〕への移居を迫られ、その途中で項羽の部下によって殺害された。「弒」とは臣下など身分の低い者が主君など身分の高い者を殺すこと。

5 七十戰場 項羽が戦った戦の概数。『史記』『項羽本紀』には、項羽が垓下の包圍網を突破して東城〔安徽省定遠県〕に逃れて来た時にはわずか二十八騎、そこで彼らに向かつて「吾兵を起してより今に至るまで八歳なり。身ら七十余戦い、当たる所の者は破り、撃つ所の者は服せしめ〔服従させ〕、未だ嘗て敗北せず、遂に霸たりて天下を有つ。然れども今卒に此に困しむは、此れ天の我を亡ぼすにして、戦いの罪に非ざるなり〔吾起兵至今八歳矣。身七十餘戰、所當者破、所擊者服、未嘗敗北、遂霸有天下。然今卒困於此、此天之亡我、非戰之罪也〕と述べるくだりに、このような状況に陥ったのが天命だとは認めつつも武将としての自負はまったく棄てていない。 **誰得** 誰が

……できようか、という反語のことば。敵 敵う、相手になる。

6 八千子弟 項羽が戦いのためにかつて江東の地から引きつれていった若者たちをいう。『史記』『項羽本紀』に、烏江〔安徽省馬鞍山市〕という渡し場まで逃れて来ると、その長が長江の向こう岸の江東に渡って再起を図れと船を準備するが、項羽は笑って「天の我を亡ぼすに、我何ぞ渡ること為さん。且つ籍〔項羽の名〕江東の子弟八千人と江を渡りて西するも、今一人の還るもの無し。縦い江東の父兄憐みて我を王とすとも、我何の面目ありてか之に見えん（どういふ顔で彼らに会おうというのか）。縦い彼言わずとも、籍独り心に愧じざらんや（天之亡我、我何渡爲。且籍與江東子弟八千人渡江而西、今無一人還。縦江東父兄憐而王我、我何面目見之。縦彼不言、籍獨不愧於心乎）」と、ここを死に場所と覚悟を決めたのである。悉 一人残らず、みな。遺 生き残る。

7 重瞳 目の中に二つの眸があることで、そのような異相を持つ項羽が人より優れた偉人であることを表す。『史記』『項羽本紀』の最後に付された司馬遷の項羽に対する評語の中に、司馬遷が人から聞いたこととして、「舜〔伝説上の聖天子〕の目は蓋し重瞳子なりと。又た聞く項羽も亦た重瞳子と。羽豈に其の苗裔なるか（なんと舜の末裔だったのだろうか）（舜目蓋重瞳子。又聞項羽亦重瞳子、羽豈其苗裔邪）。亦 ……もまた。眩（物事をよく見ることのできる不思議な目をしている筈だったのにそれでも）幻惑させられる。

斗卮酒 一斗〔約1.1.94リットル〕の酒も注げる大きな杯。鴻門の会（第二句「鴻門之會」の語釈参照）で主君の劉備が剣舞にかこつけて殺害されそうだと知った樊噲が門衛を突き倒して中まで入って項羽を睨み付けた。その後のくだりを『史記』『項羽本紀』は次のように記す。「項王〔項羽〕曰く壯士なり。之に卮酒を賜えと。則ち斗卮酒を与う。噲 拝謝して「感謝の礼をして」起ち、立ちながら之を飲む。項王曰く、之に彘肩〔豚の肩肉〕を賜えと。則ち一生彘肩（ひとかたまりの豚の肩の生肉）を与う。樊噲 其の盾を地に覆せ、彘肩を上に加え、剣を抜きて之を啗らう。項王曰く、壯士なり。能く復た飲むかと。樊噲曰く、臣〔項羽に対する謙称、わたくしめ〕死すら且つ避けざるに〔死ぬことさえ何とも思わないのに〕、卮酒安くんぞ辞するに足らん〔酒杯など遠慮しようか〕（項王曰、壯士。賜之卮酒。則與斗卮酒。噲 拜謝起、立而飲之。項王曰、賜之彘肩。則與一生彘肩。樊噲覆其盾於地、加彘肩上、拔劔切而啗之。項王曰、壯士。能復飲乎。樊噲曰、臣死且不避、卮酒安足辭）。」

8 失卻 取り逃す。龍顏隆準 「龍顏」は眉の骨がまるく突き出て、皇帝の骨相とされる。「隆準」は鼻が高いこと。漢の初代皇帝となった劉備の事を記した『史記』『高祖本紀』には、劉邦の誕生にまつわる話と容貌について次のように記している。「劉媪〔劉邦の母〕嘗て大沢の陂に息い、夢に神と遇う。是の時 雷電ありて晦冥たり〔暗くなった〕。太公〔劉邦の父〕往きて視れば則ち蛟龍〔竜の一種〕を其上〔劉邦の母の上〕に見る。已にして身有りて〔身をもって〕遂に高祖〔劉邦〕を産む。高祖 人と為り〔容貌〕隆準にして龍顏、須髯美にして〔あこひげとほおひげが立派で〕、

左の股に七十二の黒子〔ほくろ〕有り〔劉媪嘗息大澤之陂、夢與神遇。是時雷電晦冥。太公往視則見蛟龍於其上。已而有身遂產高祖。高祖爲人隆準而龍顏、美須髯、左股有七十二黒子〕。

【補説】

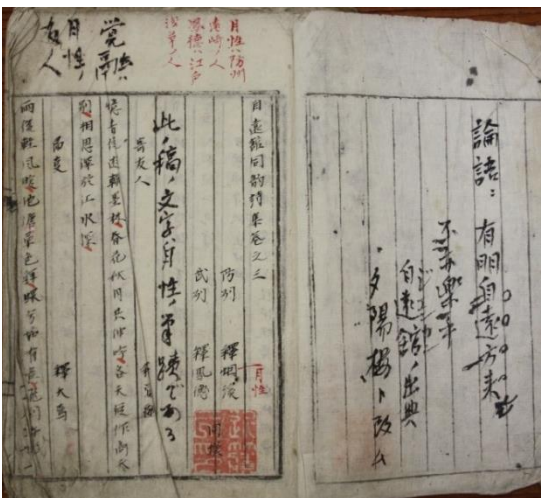
この詩での項羽に対する月性の見解は、『史記』『項羽本紀』の最後に付されている司馬遷〔太史公〕の評語「贊」の「自ら功伐〔手がら〕を矜り、其の私智〔ひとりの人間の狭い了見〕を奮いて古を師とせずして、霸王の業と謂いて、力征〔武力で制圧する〕を以て天下を経営〔治めて仕切る〕せんと欲す。五年にして卒に其の国を亡ぼし、身は東城に死すも、尚お覚寤せず〔気づかない〕して自ら責めざるは過てり。乃ち天の我を亡ぼすにして、用兵の罪に非ずと引くは、豈に謬らずや〔なんとという間違いはないか〕〔自矜功伐、奮其私智而不師古、謂霸王之業、欲以力征經營天下。五年卒亡其國、身死東城、尚不覺寤而不自責過矣。乃引天亡我、非用兵之罪也。豈不謬哉〕」というのと同じものがある。このように覇権争いに敗れた項羽に対する評価は、中国でも厳しいものがあるが、例えば、唐の杜牧〔八〇三八五〕この項羽を題材にした詠史詩を作っている。

題烏江亭 烏江亭に題す

勝敗兵家事不期 勝敗は兵家も事期せず〔予想できるものではない〕
包羞忍恥是男兒 羞を包み恥を忍ぶは是れ男兒
江東子弟多才俊 江東の子弟 才俊多し
卷土重來未可知 卷土重來〔土ぼこりを立てて再び巻き返したなら〕未だ知るべからず〔天下はど
うなっていたかわからない〕

これは、もし烏江亭を渡って再起を期したならばという、いわゆる逆接の詠史詩で項羽を批判するものである。

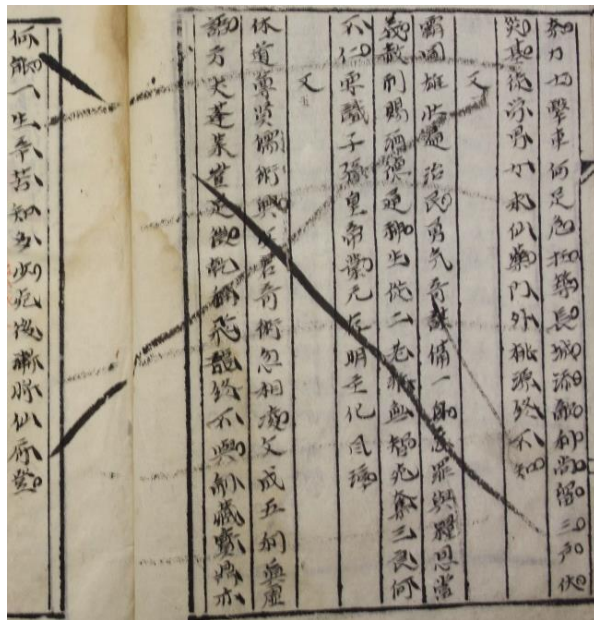
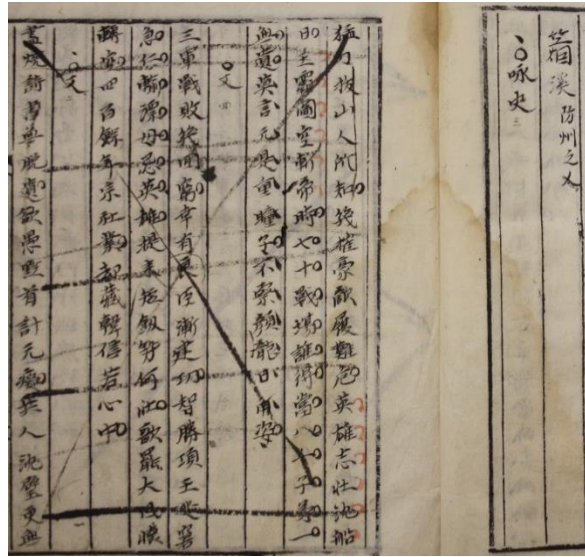
さて、この詩は『清狂吟稿』巻之一には見えず、大洲鐵然らの『清狂遺稿』が何に拠って採



『自遠館同韻詩集』

録したか不明であるが、この詩の草稿というべきものは求菩提資料館（福岡県豊前市）に所蔵されている。というのは、月性が十五歳の時からほぼ五年間にわたって学んだ豊前の恒遠醒窓の蔵春園しゅんえんの資料の多くは、恒遠醒窓の子孫に当たる恒遠俊輔氏つねとよしすけが館長を勤められたことから、現在、そこに移管されているからである。恒遠俊輔氏と求菩提資料館の格別な配慮により、月性関係資料を拝見することができたのだが、それらの中に共に切磋琢磨する友人たちと一緒に編んだ漢詩集があり、ここに掲げた『自遠館同韻詩集』もそのひとつである。「自遠館」というのは、右側の紙に墨で書かれているように『論語』「学而篇」の「朋有り遠方自ら来たる亦た楽しからずや」というのに因ちなんだ蔵春園の別名であるが、この原稿の字が月性さんの筆跡だと左側の紙に大きく書き足されている。さらに欄外上には朱で「月性は防州遠崎の人」という別の人の書き込みもある。

そして別の漢詩集『同韻集』の中に「項羽」の草稿といえるものがみえるのである。はじめの行の「竺烟溪」の「竺」は僧侶の意で、「煙」煙「烟」烟「烟」烟「溪」は月性がこの頃に使っていた号である。その下に小さく「防州之人」と月性の出身地が記され、次の行に「詠（咏）史」と称する連作詩を五首が書かれて、その最初の詩が「項羽」の草稿といえる。



猛力拔山人所知 猛力 山を抜くは人の知る所にして

幾摧豪敵履難危 幾たびか豪敵を摧きて難危を履まん

英雄志壯沈船日 英雄 志は壮たり 船を沈むる日

王霸圖空斬帝時 王霸 図は空し 帝を斬る時

七十戰場誰得當 七十の戰場 誰か当たるを得ん

八千子弟一無遺 八千の子弟 一も遺る無し

莫言元是重瞳子 言う莫かれ元是れ重瞳子と
不察顔龍日角姿 察せず顔龍・日角〔額の真ん中が隆起している〕の姿を

この詩は「詠史」の最初に置かれている詩だが、「詠史」の下に薄く墨書で「三」の字があり、次の詩は「又」と書かれ、その下に薄く「四」の字ある。内容は漢王朝の創建に焦点を当てたものである。

三軍戰敗幾回窮 三軍〔軍隊〕戦い敗れて幾回か窮まるも
幸有良臣漸建功 幸に良臣有りて漸く功を建つ
智勝項王逃窘急 智は項王に勝りて窘急より逃れ〔鴻門の会での項伯や樊噲などの機転や活

躍で窮地から脱したことをいう〕
仁輸漂母忌英雄 仁は漂母に輸すも〔劉邦の武將 韓信がむかし食事を恵んでもらった洗濯女に
恩返しをはするが〕英雄〔項羽〕を忌む

提来短劔勢何壮 短劔を提げ来たれば勢何ぞ壮なる〔劉邦が若い時から三尺の劔を提げて天
下取りの野望を抱いていたこと〕
歌罷大風懷轉空 大風〔天下統一した劉邦が「大風歌」を作って歌わせた〕を歌い罷みて 懷轉
た空し

四百餘年宗社業 四百余年 宗社の業〔四百年間漢王朝を保ったという大業〕
却藏韓信苦心 却て蔵す 韓信苦心の中に

三首目の〈又〉の下に薄く「二」の字があつて秦の始皇帝の暴政を詠む。

盡燒詩書無脱遺 詩書を尽く焼きて〔秦の始皇帝の焚書坑儒〕脱遺無く
欲愚黔首計元癡 黔首〔天下の民〕を愚にせんと欲するは計〔愚民政策〕 元癡かなり
＝人沈壁更無奈 〔異?〕人壁を沈むるも〔始皇帝が壁を沈めて河を祭ったことか〕更に奈
ともする無し

力士擊車何足危 力士 車を撃つも何ぞ危うくするに足らんや〔張良が鉄槌で始皇帝の車を打
ち壊そうとして失敗し〕

枉築長城添敵利 枉りに長城〔万里の長城〕を築きて敵の利に添え
尚留三戸伏災基 尚お三戸〔楚の国に三戸しか残らなかつたとしても必ず秦を打ち倒すという強い
復讐心〕を留めて災基〔秦滅亡の災いの元〕伏す

徒勞男女求仙藥
門外桃源終不知

徒勞なり 男女 仙藥を求めしを「始皇帝が不老不死の薬を求めさせたこと」
門外 桃源 終に知らず「秦の遺民たちが暮らすという桃花源」

四首目の〈又〉の下に薄く〈二〉の字あつて、ここは始皇帝(紀元前二五九―二一〇)よりも前の春秋の五霸(紀元前六八二―六二二)を詠む。

霸圖雄壯遍治民

覇図雄壯「天下に覇を唱えるという勇壯な穆公」 遍く民を治め

勇氣奇謀備一身

勇氣奇謀 一身に備わる

忘罪與糧恩當義

罪を忘れ糧を与うれば「穆公が仇敵の晋が飢饉に見舞われた時に食料を送つた」 恩は義に当たり

赦刑賜酒德通神

刑を赦し酒を賜うれば 徳 神に通ず「穆公は自分の馬が食べられたにも関わらず許し酒まで振る舞つたので後に窮地に追いやられた時に彼らに救われた」

生從二老非無智

生きては二老に従うは「秦の穆公は百里奚と蹇叔を尊んだ」 智無きに非ず

死奪三良何不仁

死しては三良を奪うは「秦の穆公が三人の賢臣を殉死させた」 何ぞ不仁なる

要識子孫皇帝業

要識るべし子孫皇帝の業「後世、嬴政が初代の皇帝、始皇帝となつた」

元存明主化風淳

元存す明主「穆公」の化風の淳きを「万人を善い方へと導く心の強いこと」

五首目の〈又〉の下に薄く〈五〉の字があつて、詩は、秦の後を継いだ漢王朝の武帝をも批判的に詠む。

休道尊賢儒術興

道(い)を休(や)めよ 賢を尊(おこ)びて 儒術興ると「漢は儒教を国の教えとした」

? 君奇術忽相凌

君を? 「字が不明」す奇術 忽ち相(あ)い凌(しの)ぐ

文成五利眞虚語

文成「方士の李少翁が妖しげな方術で漢の武帝の歓心を買つて文成將軍となつた」・五利「樂大も方術で漢の武帝から五利將軍を与えられた」 眞に虚語「で

たらめ」にして
方丈・蓬萊「何れも東海の中にある神仙の住むという島」 豈に徴するに足ら

方丈蓬萊豈足徴

方丈・蓬萊「何れも東海の中にある神仙の住むという島」 豈に徴するに足ら

乾稱飛龍終不與

乾に飛龍を称(い)うも『周易(易経)』の「乾」の九五の爻辞に「飛龍 天に在り、

大人を見るに利し(飛龍在天、利見大人)」とあり、主君が良臣をうるとはいうもの
の」終に与(あ)らず

制藏寶鼎亦何能

宝鼎「漢王朝が政權を担うべき象徴としての鼎」を制藏するも亦た何ぞ能く

せん

一生辛苦知多少　　一生辛苦して知ること多少ぞ（どれだけのことがわかるというのか）

死後漸將仙府登　　死後ようや漸まさく將せんに仙府〔仙界〕に登らんとす

こうしてこの連作五首を見てみると、各詩の下に漢数字が付されているのは時代順に沿ったもので、一、春秋時代の秦の穆公（第四首め）・二、天下統一した秦の始皇帝（第三首め）・三、秦の末期の項羽と劉邦の覇権争い（第三首め）、四、漢王朝の創建（第二首め）・五、漢の武帝も秦の始皇帝と同じ轍を踏んだことを批判している。このように中国の歴史を学び、それを題材にした詠史詩を作ったことが、月性をして後に我が国の幕末が危機的なものであることを把握し、そこから脱却するための方策を編み出し、しかもそれを議論の詩として詠むということの礎を確かに築いたといえよう。